

國學院大學学術情報リポジトリ

アリストテレスの医学的構想： 実践知に基づいた医術の方法論

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木原, 志乃, Kihara, Shino メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000168

アリストテレスの医学的構想： 実践知に基づいた医術の方法論

木原志乃

万学の祖アリストテレスは「哲学」(第一哲学、形而上学)、「倫理学」及び「自然学」を区別した上で、「自然学」と「医学・医術」との区別も自覚しつつ、それぞれの学問領域とその方法論について慎重に語っていた¹。『自然学小論集』(*Parva Naturalia*:以下PNと表記する)最終部では以下のように述べられる。

「『自然学者と医学者とが』どのように異なっているか、どのように異なった領域を研究するのかということが、見逃されてはならない」(*De Respiratione* 480b25f.)。

マケドニア王室の侍医だった父と、同じく医者の家系出身の母を持ったアリストテレスは、当時のアスクレピアダイの世襲的伝統を考慮すれば²、幼少期から医学的知識に触れる機会が多く、医療現場も目にしていたはずである。多くの動物学的著作群でも、解剖学や生理学、生殖学への関心が高かったことが顕著に認められるのは言うまでもない。しかしながら現存するいわゆる「アリストテレス著作集」(*Corpus Aristotelicum*)には、一見して「医学的著作」と言えるような「治療や養生法に関する体系的な叙述」は残されていない。アリストテレスは医学書を書いたかもしれないが、残念ながら現存していない、とするのがこれまでの一般的見解であったと言えよう。しかし近年、医学史家Van der Eijkは、アリストテレスの『動物誌』(*Historia Animalium*:以下HAと表記する)第10巻こそが彼の現存する「医学的著作」なのではないかと提唱し、アリストテレスの医学論の再構成が注目を集めた。これまでも様々な角度からアリストテレスと医学の関係が取り上げられてきたが³、本稿では、その解釈史におけるフィロロジカルな議論にはあまり深く立ち入らず、「医学」という学問領域についてアリストテレスがどのような知の本質をそこに見ていたのかについて一つの道筋を示したい。

第1章 自然研究と医学の連続性と非連続性

アリストテレスに医学著作があったか否か、その可能性を検討するために、まずは「^{イデア・トリケ}医学・医術 (ιατρική)」及びそれに関連する言葉を用いて、その学的特性について自然学との関係から述べた幾つかの箇所を踏まえておく必要がある。

周知のように、アリストテレスは自然学や形而上学を「観想的な知」に属するものとして、倫理学や制作学を「実践的な知」に属するものとして、それぞれの学の本質を区分して捉えていた。「観想知」は学問の対象が他の仕方でありえない理論学的領域であり、それは他の仕方であり得る個別状況に応じた実践的倫理学的領域と区分された。「医術」の知がその学的区分のうち「技術 (τέχνη)」に属するものと捉えられるなら、アリストテレスは「実践知」の中でもさらなる下位区分としての「制作知」に医術を分類していたことになる。しかし自然学の中の「^{エピステーメー}学的知識 (ἐπιστήμη)」に属するものであるなら、動物学的著作内容と同様のものとなる⁴。「医学」がこれらのうちのどの区分に属するのか、この問題は論じるに値するとして慎重に考察されていた。アリストテレスは、「魂」論の議論の次に、PN冒頭で、生命に関わる問題を論じ始めるに当たって、「医学」の目的である健康について触れ、以下のように述べている。

「また健康と病気について、その第一の原理 (πρώτας ἀρχάς) を知ることも自然学者の仕事の一つである。というのは健康も病気も生を欠くものには生じえないからである。それゆえ、自然について研究する者たちのほとんどが、そして医者のうちでその術 (τέχνη) をより哲学的に (φιλοσοφωτέρως) 探求する者たちが、前者の自然学者たちはその研究が最終的に医術に関することに帰着するし、後者の哲学的な医者たちは自然に関することから研究を始めるのである。」(De Sensu et Sensibilibus 436a18-b2)

アリストテレスによれば、自然学者が最終的には医学研究に到達するとされ、研究の順序として、「自然研究を基礎として医学を探究し始める方向性」と、「医者が自然の原理に向かう方向性」の二つが示されている。そしてPNの最終部で生命の問題を論じ終えたことを確認した後に再び、冒頭部での言及と類似した言葉で健康と病気を扱う「医学」について触れている。PNの『呼吸について』では、「医学」と「自然研究」の連続性が強調されつつ、以下のように締めくくられる。

「さて、一方で生と死、およびこれに関連する事柄については、ほとんどその全てに関して述べられた。だが他方で、健康と病気については、単に医者に属するのではなく、それらの〈原因〉(τὰς αἰτίας) を語ることは自然学者にも属している。…なぜなら医者のうち、練達にして探求心深い者たちは自然について何かを語り、かつそこから自然学の原理を把握することが当

然だと思っているし、自然について研究する者のうちでも、最も優れた者たちは、ほとんど医術の原理（τὰς ἀρχὰς τὰς ἰατρικὰς）においてその研究を終わるからである。」（*De Respiratione* 480b21ff.）

すなわち、自然研究の後に（τὰ μετὰ τὰ φυσικά）、形而上学（*Metaphysica*）ではなく、医学研究へと向かうかのような記述がなされているのである。そしてJ. Longriggによれば、アリストテレスは「医学の原理を思弁的推論に基づいた哲学原理に由来させている」と指摘されている⁵。実際、『動物部分論』では脳の冷たさと温かさに関して、脳卒中や癲癇の病を想定したかのように、それに関する説明は、「自然哲学（φυσικῆς φιλοσοφίας）に関する限り、『病理論』（ἐν ταῖς τῶν νόσων ἀρχαῖς）の中で述べる方がよいだろう」（653a10）と、あたかもPNで繰り返し示唆されていた著作、すなわち「健康と病気の第一の原理（ἀρχὰς）」（463a17, cf.464b32, 480b23）についての「自然哲学に属する限りの」（465a1, cf.463a17, 480b23）著作があったかのような言及が見られるのである。

しかしながら、自然学と医学とは共通する領域を扱いつつも、「原因（αἰτία）」の認識をめぐり重要な差異があるという点をアリストテレスは明確に示している（480b11）。自然学が追求するのは「原因」であり、他方、医学が目指すのは多様な個別状況を踏まえて患者を治療することであり、「事実」を踏まえて判断し、実践することなのである。この指摘を考慮すれば、「自然学に属する限りの医学」と、「自然学とは学的に区分される医学」と、二つの分野の医学研究をアリストテレスは想定していたのかもしれない。すなわち、もし実際アリストテレスに医学的著作があったとすれば、それはアリストテレスの現存する動物学研究内に見出すこともできようが、その場合、「自然学に属する限りの」ものである可能性がある。他方、自然学的方法論と根本的に異なっている本来の医学構想は、失われた著作として書かれていた可能性があるということになる。

自然学的著作に含まれる動物学的著作群に目を向けると、アリストテレスが「医学的著作」を執筆したことについては、幾つかの資料から手がかりを見出すことができる。身体部位やその構造と機能に関わる一連の説明には、その都度『解剖論』（*Ανατομῆς*）を参照する必要がある旨、アリストテレス自身によって何度も繰り返し示唆されている⁶。動物学的著作群に示されている様々な生物の卵生と胎生、諸器官についての観察と分類はとりわけ高く評価され（ホシザメの胎生、ウニの生殖器、反芻類の胃、カンギエイの卵生など）、その優れた考察は後の生物学の発展に大きく寄与している⁷。残念ながら現存はしていないが、それらの記述にはおそらく解剖図が付せられていたようで、視覚可能な材料が個々の記述を補う要素として重視されていたことが窺える。そして、おそらく当時人体解剖はなされなかったであろうが、この著作は医学と生物学とに共通する比較解剖学の基礎を示したものであっただろう。

この『解剖論』と並び、『医術論』（*Ἰατρικά*）と呼ばれるものが、アリストテ

レスの著作目録には含まれていたと、古代の資料は伝えている（前者は全8巻、後者は全2巻。ディオゲネス・ラエルティオスV25やヘシュキオスの「著作目録」参照）。医術論（Ἱατρικά）という書物のタイトルから、その著作内容は、擬アリストテレスによる『問題集』（*Problemata*）冒頭巻に似たような医学的問題の集成だったと推測される。さらにアリストテレスの著作目録リストには、Eijkがアリストテレスの現存する医学著作であると指摘したHA第10巻の内容がタイトル化され、『不妊症について』（ὅπερ τοῦ μὴ γεννᾶν）として挙げられている（本稿第2章参照）。また、カエリウス・アウレリアヌスはアリストテレスによる『治療について』（*De Adiutoriis*）という医学的著作を挙げて引用している。

また、アリストテレスには弟子メノンがおり⁸、彼が記した著作である『医学誌』（Ἱατρικά; *De Medicina*）は散逸してしまっているが、その講義録の一部であろうと推測されるパピルスが残されている。これはいわゆる逸名著作家（Anonymus Londinensis）のものとして知られている医学資料で、生理学の詳細な考察や医学の学説誌がそこには含まれており、アリストテレスと医学説とをつなぐ重要な文献となつてもいる。

そして、現存する「アリストテレス全集」の中には、アリストテレス自身ではなくテオプラストス以降のパリパトス派による医学関連著作であると見なされているものが多くあり、いわゆる擬作と見なされてきたアリストテレスの『氣息について』（*De Spiritu*）や『問題集』（*Problemata*）の一部などは、当時の医学理論が念頭に置かれた書物である。アリストテレスの学説との連続性も前提しつつ、ヘレニズム以降の医学的著作との関連からもアリストテレスの医学理論を再構成しなければならないであろう⁹。

以上、医学著作とアリストテレスを結びつける様々な資料を挙げたが、アリストテレスの医学論を再構成するにあたって、残念ながらこれらは推測の域を出ない断片的な資料の寄せ集めにとどまっている。アリストテレスは、動物学的著作とは別の枠組みの中で医学的構想を示そうとしていたのか、もしそうであるならば、それはどのようなものでなければならなかったのかは依然として不明である。そこでEijkが医学著作の構想に組み込むべきだと指摘したHA第10巻の分析を手掛かりに、次章以降で医学の学説と方法論について具体的に検討したい。

第2章 『動物誌』（HA）第10巻の位置付け：現存する医学書？

HAは、動物の分類や生態についての調査探究（ιστορία）であり、その研究は自然学的な基盤に立っている。すなわち、研究対象となるものが必然的な仕方である学的領域である。HAでは第1巻から多様な動物についての考察が続き、第9巻以降で人間の生殖の議論が展開される。医学との関係で注目すべきなのは第10巻で、先行する9巻と同主題が論じられるが、生殖理論全般からは次第に逸脱し、

治療すべき対象である「不妊症」についての言及に移行している。それゆえ、この第10巻のみはHAの中でも異質な要素であると見なされ、このHA10と他の諸巻との一貫性を確保できるのか、さらにその他の著作との一貫性を確保できるのかに答えることが研究者たちの課題であった。とりわけ1911年以降、以下の点が検討されてきた。すなわち、HA10は、(1) アリストテレスによる著作かどうか、もし彼の著作であれば、(2) そもそもHAの一部なのかどうか、(3) 彼の著作でないとするば、そもそもその著作はいかなるもので、HAに追加された経緯はいかなるものだったのか、である。

研究者たちの多くは、この巻をアリストテレスによる真正著作から排除すべきだと主張している。彼らによれば、HA10は使用語句に当時のヒポクラテス医学テキストとの共通性が見られ、一方ではアリストテレス著作集の中で用いられていないものが多く見られる。さらに、不妊を論じているその理論内容は、アリストテレスによる『動物発生論』(*Generatione Animalium*;以下GAと表記する)とはっきりと異なっていることが指摘されている。一般にアリストテレスの生殖理論においては、女性は素材の提供者として位置付けられ、形相としてのスペルマを提供するのは男性のみであると見なされている。これに対してHA10ではパンゲネシス説に即して両性がスペルマを提供しているとされており、これはアリストテレスではなくヒポクラテス派の主張に基づいているというのである。

このような点を根拠として、偽作説を主張する研究者たちが少なからずいる一方で、アリストテレスの真正著作説を採用している者もこれまでに見られた。その代表的な論者は、D. M. Balme、J. Tricot、P. J. Van der Eijkである。Balmeは、HA10の異質性を認めてはいるが、それはアリストテレスの円熟期のGAの生殖理論とは異なっているのであって、アリストテレスの執筆年代を考慮し、初期の著作である可能性を想定することで、その齟齬は解消できるとした。すでにTricotもその可能性を認めていた。

彼らの立場からすれば、HA10でパンゲネシス説を採用していることは、それがすぐに非アリストテレス的の見解であるということにはならない。アリストテレスの他の著作内でも、パンゲネシス説に適うような言及も見られ、それに対して、反パンゲネシス説、すなわち全身から種子(σπέρμα)が排出されるのではなく、胎児の形相に注目すべきだと述べられ(637aff.)、パンゲネシス説を採用したヒポクラテスの立場を批判するかのよう言及をHA10内部でも確認できるからである。それゆえパンゲネシス説そのものを採用しているか否かを根拠として、偽作か否かを判定することはできないというのが彼らの主張である。とはいえ、上記の指摘は、あくまでも可能性を想定した仮説に過ぎず、真正説を裏付ける主たる根拠とはなりえない(濱岡も発展的生殖説には否定的)。

一方で、L. Dean-JonesはHA10の内部でも、1-5章と6-7章とでは理論上の齟齬があると指摘した。非アリストテレス的立場から論述しパンゲネシス説を採用し

た1-5章は、「不妊について」の当時の医者的一般的な見解を記したものであり、これについてアリストテレスが6-7章を記したことにより、HAに不統一な要素が混入したのだと見なしたのである。この点については、Dean-Jonesによる詳細な注釈書の近刊を待たねばならないが、いずれにせよ部分的にであれHA10がアリストテレス自身による医学説であることを示すテキスト上の根拠が新たに議論されつつある点に注視せねばならない。

それに対して、そもそもHA10の叙述がHA1-9やGAと同一の「学問的枠組み」のもとで書かれたものであるのかと問い直し、従来の解釈に疑義を呈したのがEijkであった。すなわち、HA10はアリストテレス自身によるものであるとしつつも、それが他の動物学テキストと使用語彙も異なり、叙述のスタイルも異なっているのは、そこに学的方法論の違いがあるからだとする。そして、それはアリストテレスにとって意図的なことであるという点を考慮するとよりよく理解できるというのである。

Eijkによれば、HA10の特殊性は、その性格が「実践的」である点に目を向けられなければならない。すでに本稿第1章で確認したように、アリストテレスにおいては、自然学研究に属する動物研究と医学論とは、論じる際の方法が異なることが指摘されていた。一方のHA1-9、およびGAでは、学的知識に基づいて包括的で理論的体系的把握が一貫してその基調となっている。他方、HA10では、実用化のために有用な知識を追求している。すなわちHA10では妊娠の失敗に関して、診断の手がかりを提供することを意図しているのであり、女性の側の個別的問題を扱い、治療(θεραπεία)の要請を念頭に置いて考察されている。その点で、他の動物学的著作との根本的相違が見て取れるのである。そのような違いを考慮すると、まさにHA10こそがアリストテレスの現存する医学的著作なのだとEijkは主張するのである。

以上、HA10の諸解釈について、その要点をごく簡単に紹介するとどめたが、本稿第1章で考察した「自然学と異なる医学」の方法論を考慮してみれば、Eijkの指摘は興味深い。「医学的構想」が具体化したテキストとしてHA10を読むことは、文献学的にも、内容的にも推測の域を出ず、あくまでも一つの可能性を示しているにすぎない。とはいえ、ヒッポクラテス医学からの用語を導入し、HAの議論との連続性をある程度保ちつつ、病の治療について説明し、その学問としての実践的方法論を現実化していると見なすことは、決して逸脱したアリストテレス理解ではないであろうし、むしろ彼の学体系の中に可能性として開かれた医学構想を示すことにもなるであろう。

第3章 実践知としての医術：個別的状況における医学的認識

アリストテレスは倫理学の探求の方法を説く際に、『ニコマコス倫理学』(*Ethica*

Nicomachea:以下ENと表記する)の多くの箇所積極的に医術のアナロジーを用いている。すでに本稿第1章で述べたような自然学の一分野としての医学の性格とは別の、倫理学分野における実践知と重ねて、個々の患者に対する医療倫理の重要性を、アリストテレスは示していたのである。

EN I 1では、それぞれの技術が求めるところの善の多様性の一例として、「医学にとっての目的(=善)は健康である」と述べられている。ここでの医術の扱いは目的(τέλος)としての善を追求している術の一つにすぎない。次に医術への言及が見られるのはI 4以下であり、そこではプラトンのイデア論を引き合いに出しつつ、最高善と幸福との関係が吟味され、プラトンとは違った仕方での幸福追求の学として自らの実践学が位置づけられている。すなわち、プラトンにおいては観想と実践は切りはなされず、医術のアナロジーを用いて、医術が健康の知であるの対比されて、哲学は善の知であると見なされている。一方、アリストテレスにおいては観想と実践は区別され、医術のアナロジーが後者の実践哲学を説明するために用いられる。それゆえ、アリストテレスの最高善はプラトンの「善のイデア」と袂を分かち、あくまでも「人間の善」であることが強調され、その限りでは、彼の倫理学や政治学はプラトンの包括的な存在論とは根本的に異なっているのである。というのも、アリストテレスにとって、アルケーを出発点とする議論とアルケーへ向かう議論とは違いがあるのであって、根元的なアルケー(普遍的原理や理由)を把握していなくとも、我々に属する限りのアルケーとして、「事実」を知っていればよいとされるからである(PN 480参照)。

そしてEN Iの最後でも、アリストテレスの倫理学や政治術が「徳」との関連からどのような意味での魂の学なのかということが、医術のアナロジーを通して明らかにされている。

「[われわれの求めていた善は人間の徳であり魂の徳である。そして幸福を魂の活動と言っている。]…医者の中でも教養のある人は身体に関する知識のために腐心するのである。したがって、政治家も魂に関して研究しなければならないが、このような研究もそういう目的のためになされるべきであり、つまり求められるところにとって十分である程度においてなされるのでなくてはならない。その程度を越えて厳密な研究をなすことは、思うに現在の課題を超えたいっそう労力を要する仕事なのである。」(EN I 13, 1102a18)

以上のように、アリストテレスは倫理学の新たな方法を提示する重要な個所で、医術から説明をして、学としての医術の限界についても触れている。すなわち倫理学においては「善き人」となることが目指され、そのように徳に即して魂を活動させることが人々にとっての幸福であり、よく生きることである。それは医者が患者を「健康な人」へと治療することと同様の知を必要とする。さらに医者も同様の仕方では身体を善き方向へ導きはするが、その際に治療をすること以上の学問的知識の追求を目指すべきではないとして、理論的厳密さを要求しないこ

とが強調されているのである。

「行為に関するいかなる説明も、輪郭的であり、厳密でないのが当然であるということである。行為に関わる事柄も、利益になる事柄も、ちょうど健康に関する事柄と同様に、何も確然たるものを含んでいない。…行為する人々がその都度自ら個別状況に適したことを考えなくてはならない。ちょうど医術や航海術の場合がやはりそうであるように。」(1104a2ff)

「思慮は普遍だけを対象にするのではなく、個別的な事柄をも知らなくてはならないのである。…それゆえある人々が知識を持っていないのに、知識を持っている人々よりも行為において優っていることがあり、それはとりわけ経験ある人々の場合はそうなのである。例えば、もしひとが〈軽い肉は消化がよく健康にいい〉ということは知っていても、〈いかなる肉が軽いか〉を知らなければ、この人は健康を作り出すことはできないが、〈鳥の肉が健康にいい〉ということを知っている人ならば、いっそううまく健康を作り出せるだろう¹⁰。」(1141b15ff)

さらにEN II、III、VIでは、「中 (μεσότης, μέσον)」の選択 (προαίρεσις) という独自の概念を説明し、そしてロゴスとの関わりから「熟慮に基づく欲求 (βουλευτική ὄρεξις)」について論じられる。Lloydによればやや粗いアナロジーではあるが、これらの箇所では理論的な知識と医術との関連が明確にされている点で重要である。

「われわれが熟慮するのは目的に関してではなく、目的への諸々の手だてに関してである。なぜなら、医者の場合に熟慮されるのは、病人を健康にすべきか否かではなく…。かえって人々は目的を設定した上で、この目的がいかなる仕方、いかなる手段によって達成されるであろうかを考察する。」(1112b12)

「思慮が知恵を支配するのではなく、魂のより優れた部分を支配するわけでもない。それはちょうど医術の健康に対する関係と同様であり、すなわち医術が健康を用いるのではなく、健康が生じるように計らうものである。それゆえ、命令も思慮が知恵のためにするのであって、知恵に対してするのでない。」(1145a6ff)

医者は患者をなぜ治療するのかではなく、個別の場合に応じてどのように治療するかを考えねばならない。それゆえ実践知である思慮 (φρόνησις) をもつ必要があるのだが、知恵 (σοφία) や「ただしいことわり (ὁρθὸς λόγος)」に従うことに対して、つまりロゴスに関わる目的論的なあり方に関しても、倫理学は医学と同じ困難を被ると指摘されている。すなわち、正しい行為を選択するための基準となる知、自足的で究極的な最高善の知を要請しつつも、あくまでも個別的なアプローチからの知の形成と実践の視点を見失ってはならない。医術を用いる際にも、場合によって対処法は異なるのだから、個別に関わる教育を受けねばなら

ない (1180b8,28) のだし、また経験を介して普遍的な判断をするのでなければならない (*Metaph.*981a)。つまり個別的に変化するものに従属していて審議を必要とするものではあるが、全体としての知恵に関わっている限りで、医術も棟梁も舵取りも、よりいっそう学であると見なされる (cf.*Metaph.*981a)。ここにおいて初めて、哲学と医学との相互補完的關係が見て取れるのである。

これらの特徴付けからすれば、Longriggのように、自然哲学から医学の第一原理が導かれるとアリストテレスが考えたとするのは誤りであろう。「自然学に基づいて」医学を始めるということも、決して医学が「人間とは何か」といった根本的な「原因」を知った上でしか成り立たないというのではなく、また研究対象を同じくするとしても自然学研究のように完全に理論的な学に属すると見なすべきではない。だからこそPNでも、自然について探究する医者には「より哲学的に (φιλοσοφωτέως) 探究する」(436a21)、「練達にして探求心深い (κομψοί ἢ περιέργοι)」(480b28) という限定が加えられているのであろう。むしろ医学それ自体としては、理論的な知と関わりつつも個々の場合に依拠して知覚を判断材料とし、善を目指す推測の術としての学でなければならない。従って、医者自身のあり方が密接に関わってくるものである。

さて、以上で見てきたことは、ヒポクラテス派が確立した「医術」論と照らし合わせると、多くの点で共通していると言えよう。すなわち重要なのは、アリストテレス自身が医学の学問的方法論的な観点に多大な注意を払っているということだけではなく、Jaegerが指摘したように、当時の様々な医学関連文書、とりわけヒポクラテス文書の「古い医術について」(*Vetere Medicina*:以下VMと表記する)で語られた言葉を用いて議論を展開しているという点である。

「[病気などの諸害への対処として] 何かある尺度を得る努力をしなければならない (δεῖ γὰρ μέτρου τινὸς στοχάσασθαι)。しかしそれでもって正確な知識が得られる尺度とは、数でもなければ目方でもなく、身体の感覚 (αἴσθησις) に他ならない。」(9)

「何かある尺度を得る」とほぼ同義の「中を目指す (στοχαστική τοῦ μέσου)」という言葉はアリストテレスENⅡで繰り返し用いられ (1106b15, 25, 1109a22, 30)、そしてその「判断は感覚 (αἴσθησις) に由来する」という、明らかに共通の言明も見いだされる (1109b24, 1126b4)。そしてプラトンもまた、同じ医術のアナロジーを語る際にこの二つの組み合わせのタームを用いているのである¹¹。

ディオクレレスもFr.138ではστοχάζομενοςという言葉を用いて健康に合った食物の混合について検討している。JaegerがFr.112,138について強調したように、ここでディオクレレスがVMの思考過程をたどりつつ言葉の選択にまで配慮して語っているとするならば、当然VMの見解は同様の言葉で医術のアナロジーを展開していたアリストテレスの医術観ともある重要な関連をもっていたはずであろう。さらに、他のヒポクラテス文書の中でもこの語が同様に用いられている (*Off.*4,

Art.4, Sept.9, Medic.9, Ep.16)。これら医学理論の推測術 (στοχαστική) が、のちのケルソスによって医学におけるars coniecturalisと名付けられたことからしても、アリストテレスはENで意識的に医学の方法について語っていたのだと解することができます。

VMに戻って医学の探究法をみると、そこで繰り返し主張されていたのは、「医術は空虚な仮定を必要としない」(1, 2) ということである。批判されるべき哲学者やソフィストたちの議論方法、すなわち「病気や死の原因となるものを同一の原理へと絞ってゆき、すべてに共通の一、二を仮定する」(1) という方法とは違うものとして、「医術」という技術が発見されているということ、そしてその「原理も方法」(2) も発見されているということである。しかし発見されたその術も「人間とは何であるか、どのような原因によって生じるのか、その他のことを詳しく知ること」であり、その理由には「医者にとっては、いやしくもその務めを果たそうとする以上、自然について少なくとも次のこと〔食べ物やその他の個別的なものとの関係性〕を知り、また知ろうと熱心に努めることが必要だからである」(20) と語られている。この点で彼らの新しい方法は「人間とは何か」という知に関わったものとして成立しつつ、しかし、そこから出発するのではない。それは決して素人の知らないようなことを論じる専門的な術ではなく、万人に用いられるものであり (4)、人を納得させることができないと見なければならないものとして、無知から知へ限りなく近づいてゆくものである (12)。

「古い医術を、あらゆる点で正確をえていなければそれは成立せず、またその研究の仕方が立派でないとして斥けてはならないと考えるものである。それどころかその発見は、深い無知状態のなかから推理により精密への近似点にまで達することができたという理由で、偶然のものではなく立派で正しいものとして驚嘆に値すると見なすべきである。」(12)

「同じ方法で探究しつつ始終新たな発見をしている。」(4)

アリストテレスはこれら医学理論の側から提示された方法論的な問題に答えて、医学が哲学および自然学の知に絶対的に依存するものではなく、実践知を説く倫理学との結びつきを重視したのである。

終わりに

現代における学問のあり方として、さらなる高度専門分化を志向するよりも、学びの学際的・統合的性格に注目すべきであるとの警鐘を鳴らされることがしばしばであり、医学に関しても同様である。F. Tellenbachは、医学が単なる科学主義に陥ることなく、人間学に基づいた哲学へと回帰すべき重要性について語った。そして医療技術の急速な進歩の中で、「病む人」に向き合うための「医の倫理」の必要性はなおさら増していると言えよう。

アリストテレスもまた、医学の学的領域に関して自然学との連続性を前提しつつも、そこに埋没しない医学独自の方法論を考慮しながら、倫理的実践知と共通の医学知を強調していた。すなわち「医」の本質に目を向ける際に、自然把握そのものをめぐり、その普遍的原因を自然学的に探求する方法論とは異なる、価値の問題を組み込んだ個別的な実践の方法論が必要となるのである。ここで、アリストテレスの観想学と実践学とを単純に線引きすることにも我々は慎重であらねばならないであろう。すなわち、実践のない純粋な観想は神のみが実現しうるもので、その限りでは藤澤令夫も指摘する通り¹²、「アリストテレスが組織的な概念装置によって提示した観想と実践の相互排除的な峻別は虚構である」。そして、その概念装置の延長上にある現代の学問のうち、「あらゆる実践との関連を全面的に排除した〈没価値的〉な観想＝理論の追求を建前にしてきた科学、特に自然科学は、観想知であるよりも対象を操作するための操作知に他ならない」。したがって、操作知としての医療技術の高度な発達を通して、むしろより先鋭化したかたちでわれわれは「いかなる死が幸福か」「いかに生きるべきか」の根本的問いに向き合わざるを得なくなっていると言えよう。

目的論的な視点を組み込み、個別状況をどこまで俯瞰的に全体論的視点から判断できるのか。単なる学的知識でなく、独自の術として自存した医学・医術に基づいて、個別状況の判断に際してどこまで深い洞察を持ち、健康という善へ向けて実践できるのかの認識がそこに求められるのである。その限りで、ヒポクラテス医学と同様、アリストテレスにとっても「医術の道は長く（*ἡ τέχνη μακρή*）」（*Aphorismi*, I,1）、「医者とは医術の僕（*ὁ ἰατρὸς ὑπηρέτης τέχνης*）」（*Epidemica*, I,11）なのである。

参考文献

- Althoff, J. 1999, "Aristoteles als Medizindoxograph", in: P. Van der Eijk (ed.), *Ancient Histories of Medicine*, Brill.
- Balme, D. M. (ed.), 2011, *Aristotle: 'Historia Animalium'*, Cambridge University Press.
- Dean-Jones, L. 1994, *Women's Bodies in Classical Greek Science*, Oxford University Press.
- Van der Eijk, P. J. 1999, "On Sterility (HA X), A Medical Work by Aristotle?", *Classical Quarterly* 49, in P. Van der Eijk (ed.): *Medicine and Philosophy in Classical Antiquity*, Cambridge University Press, 2005.
- Jaeger, W. 1938, *Diokles von Karystos, die griechische Medizin und die Schule des Aristoteles*, Weidmann.
- Jaeger, W. 1957, "Aristotle's Use of Medicine as Model of Method in his Ethics", *Journal of Hellenic Studies*, 77, 1.
- Lloyd, G. E. R. 1968, "The Role of Medical and Biological Analogies in Aristotle's Ethics", *Phronesis* 13.
- Longrigg, J. 1993, *Greek Rational Medicine*, Routledge.
- López-Salcvá, M. 1996, "Hippokratische Medizin und aristotelische Handlungs-philosophie: Analogien und Parallelismen", in: R. Wittern/ P. Pellegrin (eds.) *Hippokratische Medizin und antike Philosophie*, Olms, 2000.

Manetti, D. 1999 “‘Aristotle’ and the Role of Doxography in the Anonymus Londiniensis (PBrLibr Inv. 137)”, in: P. Van der Eijk (ed.), *Ancient Histories of Medicine*, Brill.

Oser-Grote, C.M. 2004, *Aristoteles und das Corpus Hippocraticum. Die Anatomie und Physiologie des Menschen*, Franz Steiner Verlag.

Tracy, T. J. 1969, *Physiological Theory and the Doctrine of the Mean in Plato and Aristotle*, De Gruyter.

Tricot, J. 1957, *Aristote, Histoire des animaux*, Vrin.

濱岡剛 (訳) 2015, 「動物誌」第10巻, 『アリストテレス全集』9 (「動物誌」下), 岩波書店.

藤澤令夫2001, 『藤澤令夫著作集』VI, 岩波書店.

※なお、ヒポクラテス邦訳は岩波文庫版に従い、必要に応じて適宜変更した。

注

- 1 前5世紀以降の「ヒポクラテス文書」(*Corpus Hippocraticum*)において、「哲学」の抽象的思索と区別された「医術 (ἡ ἱατρικὴ τέχνη)」について語られ始めた。そこにおいて医術知のアイデンティティが自覚化され、医学が一方では自然科学の合理的把握への第一歩を踏み出し、他方では個別的経験的な場面での臨床医学の方法論が重視されることとなる。
- 2 父ニコマコス、アスクレピオスの子マカオンの子である同名のニコマコスの血筋を引くとされ、アレクサンドロス大王の祖父であるマケドニア王アミュンタスⅡ世の友人であり宮廷医師であった(ディオゲネス・ラエルティオスⅤ1)。
- 3 1930年代以降、アリストテレスとディオクレスの医学の關係に注目したW. Jaeger 1938、アリストテレスの医学と倫理学のアナロジーについて論じたJ. Lloyd、医学の学説誌家としてのアリストテレスを評価したJ. Althoff やD. Manetti、ヒポクラテス文書とアリストテレスのテキストを比較検討したC. M. Oser-Groteなど、その他近年のJ. JouanninaやP. J. van der Eijkらによる意欲的な活動にもアリストテレスと医学を結ぶ研究の顕著な隆盛が見られる。
- 4 medicineを意味するἡ ἱατρικήは通常τέχνηを補って「術」と理解するが、ἐπιστήμηとしての「学」scienceでもある。
- 5 Longrigg, 150-151, 159.
- 6 アリストテレスは20箇所も、この書について言及している。
- 7 周知のように、アリストテレスはレスボス島周辺の生息動物を詳細に調査し、そしてその実証的研究成果に基づいた解剖学はかなり正確なものであっただろう。
- 8 Plutarchus, *Quaestiones convivales*, VIII 733C参照。
- 9 「第二のヒポクラテス」と呼ばれたディオクレスとの関係も考慮せねばならない。Jaegerについて書評したEdelstein (AJP 61, 1940, 489)、はアリストテレスとディオクレスが同時代人であったことは認めても、哲学以外に医学と動物学においてディオクレスがアリストテレスに影響を受けたことを疑っている。しかし根拠は希薄で、特に動物学関係のアリストテレスの豊富な資料からしても、またリュケイオンとディオクレスの関係からしても当然医学においても、両者の関係を無視するべきではない。
- 10 鳥肉の例は医学文書*De Victu* c.46-50参照。
- 11 医術アナロジーを巡ってのプラトンとの相違についてはここでは触れない。Grg.では「魂の世話・治療 (θεραπεία)」が課せられた哲学に対して身体の病を治療する医術はその類比として示されている。また*Phdr.*ではヒポクラテスの医学の方法は哲学の問答法的な方法のための古典的なモデルとして賞賛されている。Jaeger 1957はこれらとアリストテレスの医術のアナロジーとの違いを際立たせようとしている。
- 12 藤澤, 375f.